

氷の貌

藤井常世



不識書院

氷の貌

藤井常世

不識書院

氷の貌

一九八九年一月二五日発行

著者——藤井常世

東京都杉並区上井草三—四—一二 〒167

発行者——中 静 勇

発行所——不識書院

東京都千代田区神田小川町三—二 〒101

電話 東京二九二—九一〇三 振替 東京五—一九〇九九五

印刷——精興社 製本——牧製本

定 価——二五〇〇円（本体二四二七円）

氷の貌 目次

壺

氷の貌

山を走る

天の火

紅きはまれり

生のなかば

堪へず紅葉

29 25 18 14 9 5

仕事	ヴァイオリン	糲の裡なる卵	式	歌のゆくへ	遙空の萩	少女	春庭	椿森	禊
70	64	57		51	43	40	38	35	33

赤毛の鴉	73
朱鷺	78
春の馬鈴薯	82
印度林檎	86
領分	90
花むくろ	92
晩夏花明	95
夏の花	98
ふるさとの闇	101
青き花	103
木賊	105

庭の千草

連想

参

笛

ひとむらずき

見えぬぞよき

あかがねの月

この世

火を放つ

冬林檎

150 147 144 141 137 134 123

112 108

あとがき	
秋の庭	
予感	
あさの雪	
花に遇ふ	

169	165	160	157	154
-----	-----	-----	-----	-----

氷
の
貌

壹

氷の貌

女のなかの鬼、という主題で――

はつかなる笑みを湛ふる小面のうちら貼りつく氷の貌われは

君が一生にあひしをみなのかなしさを語りたまへ微笑みの裡を知らねば

鐘を纏く尾もなく人打つ咎なく過ぎむ一生を諾ふべしや

いまだ奪りつくさねば心喘ぐなり人ありて歌ありて籠れる夜半を

若き日のゆめ残れるはむごきかな破れ三味線の裂けめの真闇

憎みしをかくたはやすく死なしめし夢覺めて胸に十指熱かり

忘れ果ててつひにやむべき執心の寒椿咲けるかぎり苦しむ

憐れまるることなど嫌ひ　貯へし冬林檎食み尽しても冬

足摺りの人も老鬼になりはてし古き世がたり沁みて思へり

ふたたびは産まざらむ身の身を揉みて宿ししものをわが鬼と呼ぶ

山を走る

萩すすき分けて柴刈る女にて山走りつつ人を恋ふべし

鬼となりて戻りくる夜のかなしみの背に負ふ柴の身にとがらずや